

謡曲のことわざ

古 保 勲

一、はじめに

能楽の詞章としての謡曲と科白劇としての狂言の間には、舞台の芸能であるという点で共通する。又「わらんべ草」三、四十八段（大蔵虎明著 岩波文庫）には

狂言ハ能のくづし。真と草也。能ハ連歌、狂言ハはいかいのこ
とく、はいごんをいゝ。されば狂言の躰ハ能也。躰、用、色と
たてゝ躰を用て色どる也。其證據ハ能をくづしたる狂言おほし。
能の仕舞は詞をさきか、あとにして、文句にさへらず、狂言ハ詞
にあてゝする此かハリ也（下略）
と記してあるように、狂言は能のくづしであつて、狂言の本体は能
であることがうかがえる。

しかし、思想の面からは、「能狂言が世相を諷刺して人情の機微
を穿ち、道德の欠陥を暴露してゐるのに対し、謡曲は理想派の文芸
として典雅な貴族的趣味の涵養に力め堅固な国民道德の向上を計つ
てゐる」^{注1}という違いがある。また、謡曲と狂言の違いを言語位相

という面から把えてみると、謡曲は文章語であり「候」体が用いら
れ、修辭としては能の歌舞性に応じて当然ほとんどすべてが韻文的
である。これに対して狂言は喜劇的構成を持つ科白劇^{注2}であるので
ある程度改まった言葉ではあるが、ほぼ当時の日常語に近いものと
言へ、「ござる」体が用いられている。

二、謡曲のテキストおよび

ことわざの基準について

謡曲中に見られることわざを抜き出すにあたって、古謡本として
光悦本 謡曲百番 日本古典全集（日本古典全集刊行会）
を使用し観世流の不足を補うものとして

謡曲大観 佐成謙太郎著（明治書院）
を使用して作業にあたった。

ことわざを抜き出す基本方針については狂言のことわざを抜き出
す基準（拙稿「室町時代のことわざ」 密田良二教授退官記念論集

一五九ページ)を踏襲した。謡曲でことわざを使用する際には、「げにや——」「——といふことのあれば」「——とて」「——なれば」「——如く」「それ——」「——と申」「——と聞くものを」

という言葉にあるように狂言と比べて、ややことわざの引用にあつての言葉を省略して、直接ことわざを出す場合が多かった。

これらのことわざを、ことわざ集で確かめるために

毛吹草 松江重頼選 正保二年刊(岩波文庫)

世話尽 僧 空願編 明暦二年刊(更生閣書店)

譬諭尽 松葉軒東井編 天明六年刊(国語学資料第10輯)

諺苑 太田全齊稿 寛政九年刊(新生社)

を使用したのは前回の作業と同じである。記載に当つては、

謡曲のことわざ(曲名、テキスト略号、△光悦△光悦本・謡曲

百番、大観△謡曲大観△)

ことわざ集の略号△毛吹草△毛 世話尽△世 譬諭尽△譬

苑△諺△とし、さらに

参考として上げている狂言のことわざについては

狂言のことわざ(曲名、テキスト略号△能狂言・岩波文庫

集△狂言集・日本古典全書、三百△狂言三百番集・富山房百科文

庫△)の順序・略号を用いた。

三、謡曲の「ことわざ」の特徴

前述の観点、基準をもとにして謡曲のことわざと狂言のことわざを比較してみると、次のような特色がある。

(1)狂言の場合は直接攻撃のことわざでもって相手を攻撃している

のに対して、謡曲では典雅な貴族の趣味を特色とするので攻撃的なことわざを用いず、間接的な表現で攻撃する。それも聖人、智者の例を引用して説得している。狂言では二十例近くあつたが謡曲ではわずか四例しか見当らない。

智者はまとわす 勇者はおそれず(八島 光悦)

(2)親子の間に関することわざが多く、親と子の契りの深さを感じさせられる。

おやこは二界のくひかせ(天鼓 光悦)

親と子の一世の契り(仲光 大観)

親は千里を行けども子忘れぬ(木賊 大観)

(3)神、仏等宗教に関することわざが多い 神仏の信仰の深さをあらわしている。これは、能楽源流の猿楽座がもと寺社に付属していた関係上使われているのだと思われる。

神は正直のかうへにやとりたまふ(吉野静 光悦)

神は人の敬ふによつて威を増す(巻絹 大観)

一樹の陰や一河の水 みな是他生の縁(千手 光悦)

中には、諸行無常(芭蕉 光悦)老少不定(藤戸 光悦)など漢訳仏典からとられたものもあるが、狭義のことわざの条件としての教訓性を含むこと、庶民の間に伝承していることを考えたとき少しずれるのでことわざの周辺のものとして別に考えたい。

(4)恋愛否定のことわざがある。狂言で笨女狂言に出てくるおおらかな愛情に比して、謡曲では道徳的にとらえ、恋愛を恐るべきものとしている。

恋はくせ物(花月 光悦) 恋の重荷(恋重荷 大観)

(5)漢籍の故事や詩句をそのまま切りとつたものが見られる。このことは謡曲作者たち、特に世阿弥の漢文学の素養の深さを語って

いるものといえるが、庶民の間の伝承性を考えたとき狭義のことわざと言えないので、(3)の仏教の経文と同様にして別にしたい。

邯鄲の仮枕(鉢木 大観) 秋の扇(班女 光悦)

二千里の外の故人のころ(三井寺 光悦)

春宵一刻值千金(小塩 光悦) 槿花一日の榮(千手 光悦)

輕躁激して影唇を動かせば花も言はぬ色(雲林院 大観)

能が主として歴史や伝説物語の中の有名人をシテにして、シテ一人にスポットをあてて、謡でその心情を表現している性格上、ことわざの使用はほとんどシテであるものも狂言の場合と同じである。

また、世阿弥十六部集 能作書(吉田東伍校註 能楽会)の中に「其外 よきこと葉名句などをば為手の云事に書へし」と書いているのも シテにすべてを集中しようとする態度のあらわれである。

四、謡曲のことわざ

謡曲中に見られることわざについて機能別に大藤時彦氏のあげている分類にしたがって、百二千余句のことわざを列記したい。○印は狂言のことわざと共通するものである。また同と書いてあるのは全く同じもので重複を避けたものである。

『攻撃のことわざ』 簡潔な文句で人間の愚劣弱点をあざけることわざであるが、謡曲は性格上そのような例はなく、聖人、智者の例をもつてきて理想像をあげて説得している。

1 敵の前のたふれ(調伏曾我 大観)

ワキの箱根別当のことばで「言語道断かかる聊爾なる御事にて候。さやうの御心中あらば敵の前のたふれ、ただまず御帰りに給へ」と相手に説得している。

② 言葉おほき者はしなすくなし(吉野静 光悦)

言葉多き者は品少なし(二千石一集)

ことばおほきはしなすくなし(毛)

③ せいしむ人にまみえず(咸陽宮 光悦)

聖人ひとにまみえず(岩橋一三首)

4 智者はまとはす 勇者はおそれず(八島 光悦) 同(毛) 同

(世) 知者不_レ惑仁者不_レ憂 勇者不_レ懼(譬)

『経験のことわざ』長年の経験の伝達のために用いられることわざ。年長者が生活態度に関するものや実生活の全面的知識を伝えるために、口誦のよいことわざを使用した。

5 悪人の友を振り捨てて善人の敵を招け(教盛 大観)

⑥ かみすむときはしもにころぬ(養老 光悦)

上澄ぬ時は流れの末までもにぎくと脈はひ(止動方角一集)

集)

7 神や仏とは唯是水波のへたて(道明寺 光悦)

かみとほとけとはすいはのへたて(毛)

神と仏とは水波の隔てなり(譬)

8 僧俗にあらず(松虫 大観)

筑紫人虚言する(藍染川 大観) 同(蛸一三首)

10 花に三春の約あり(鞍馬天狗 大観)

はなに三しゅんのやくあり(毛) 同(世)

花ニ三春ノ約アリ(諺)

11 水至って清ければ魚住まず(放生川 大観)

水いたりてきよければうをすまず(毛)

水清ければ魚不_レ生(譬) 水清ければ魚スマズ(諺)

12 雪は豊年のみつきもの(難波 光悦)

曲中のシテである老翁が「その年つきもきはまれは、はまの真砂のかす積りて、雪は豊年のみつきもの ゆるす故にや」と経験を伝えている。

雪は豊年の表示（譬） 雪ハ豊年ノ瑞（諺）

『教訓のことわざ』

実生活の知恵をあらわしていたことわざが教訓性を帯びたものに変化している。「げにや」「——ということのあれば」「——とて」「然るに」と知識を自分のものとでてそのことわざをとり入れている。謡曲の思想として堅固な国民道德の向上を計っているが、ことわざの中にもそれがあらわれ、特に神仏に対する崇拜、親子愛、忠君、友愛等道德的なものが多い。謡曲のことわざ百二十余句のうち六十余句と約半数を占めている。

13 明日をも知らぬこの身（大原 大観）

明日知らぬ我身と思へど暮ぬ間の今日は人こそ悲しかりけり

紀貫之（譬）

14 あふは別成べし（班女 光悦）（揚貴妃 光悦）

逢ふは別れの始め（墨筆・能）同（譬）

あふはわかれ（毛） 逢ハ別 生ハ死ノ本（諺）

15 藍より出て藍よりふかし（檜垣 光悦）

あふよりいでゝあるよりあおし（毛）

16 石に精あり 水に音あり（殺生石 光悦）

17 一樹の陰や一河の みな是他生の縁（千手 光悦）（山姥 光悦）（経政 光悦）（住吉詣 大観）（定家 大観）（知章 大観）（錦木 大観）

一樹のかげ一河のながれ（毛） 一樹一河も他生の縁（世）

一樹の陰に宿り一河の流れを汲むも他生の縁（譬）

一樹ノ陰一河ノ流（諺）

曲中では「——という白拍子をぞ謡ひける」と白拍子として取り上げているがことわざとしたい。

18 打たれても親の杖（小袖曾我 光悦）

19 うつればはかるならひ（揚貴妃 光悦）

20 公の私（俊寛 大観）

21 公の私（米市・集）同（譬） 公ノ私（諺）

22 思ひうちにあれば色は外に見えつらん（松浦物狂 光悦）

（松風 光悦）（熊野 光悦）

思ひ内にあれば色外に現はるゝ（花子・能）

23 思ヒ中ニアレハ色外ニアラハル（諺）

おもひたつ日を吉日（唐船 光悦）

24 思ひ立つ日を吉日（素襖落・集）同（譬）

思ヒ立日が吉日（諺）

25 おやこは三界のくひかせ（天鼓 光悦）

26 子は三がいのくびかせ（毛） 親子は三界の頸械（譬）

27 親と子の一世の契り（仲光 大観）

親子は一世の契り（譬）

曲中では「七世の孫に逢ふこともたとへならずや、親と子の一世の契りの二度逢ふぞ嬉しき」と用いている。

28 親子は一世のなか（熊野 光悦） 親子ハ一世（諺）

29 親は千里を行けども子を忘れぬ（木賊 大観）

親は千里を往けども子を不レ忘（譬）

親ハ千里ニ往トモ子ヲ忘レヌ（諺）

30 思愛愛執の涙は四大海より深し（身延 大観）

31 好事門をいてす悪事千里をゆけ共子をは忘れぬ（藤戸 大観）

- かうじ門を出でず（柑子一能）
 かうじもんをいでず あくじ千里をはしる（毛）
 好事不_レ出門 惡事行_二千里（響）
 好事門ライデズ 惡事千里ヲユク（謔）
 壁に耳岩物いふ世の中（小鍛治 大観）
 壁に耳（薩摩守一三百）同（世） 壁に耳 垣に目口（毛）
 壁に耳あり（響） 壁ニ耳（謔）
 神ならで三熱の苦しみ（葛城 大観）
 神は正直のかうへにやとりたまふ（吉野静 光悦）（代主 大観）
 神は正直の頭に宿る（宮廻り一三百）同（毛）同（響）
 神ハ正直ノカウベニヤドル（謔）
 神は人の敬ふによつて威を増す（巻網 大観）（白髭 大観）
 神は敬ふに威をます（世）
 神は人の敬ふに依つて威を増し（響）
 鬼神に横道なし（鐘馗 光悦）（大江山 大観）（野守 大観）
 鬼神はわうだうなし（毛） 鬼神に横道無し（響）
 昨日は人の上 今日はおれをも知らぬ身（知章 大観）
 けふは人のみのうへ あすはわが身のうへ（毛）
 麒麟も老いぬれば驚馬に劣る（景清 大観）（大仏供養 大観）
 麒麟も老ぬれば驚馬におとる（毛）同（世）同（響）
 麒麟モ老ヌレバ驚馬ニ劣ル（謔）
 くないは園生にうへてもかくれなし（安宅 大観）（頼政 大観）
 くないは園生に植えても隠れ無し（響）
 暮藍は園生に植えても隠れ無し（響）
 紅ハ園ニウエテモカクレナシ（謔）
- 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
- 37 現在の果を見て過去未来をしる（安宅 光悦）同（響）
 賢人二君に仕へず（錦戸）
 けんじんは二君につかへず（毛） 賢臣二君につかえず（世）
 賢人二君ニ事ヘズ（謔）
 巧成名とけて身退くは天の道（船弁慶 光悦）
 巧成名とけて身退くは天の道（船弁慶 光悦）
 心の師とはなり 心を師とせざれ（熊坂 大観）
 心の師とはなれ ころをしとせざれ（毛）
 心を師とする事なかれ（世） 心の師とはなれ心を師と_レ為
 （響） 心ノ師トハナレ心ヲ師トセザレ（謔）
 子は親に似るなるもの（松山鏡 大観）
 恋には上下をわかれ習ひ（綾鼓 大観）
 恋の道には上下は無し（響）
 恋はくせ物（花月 光悦） 恋は曲物（謔）
 子ゆへにまよふ親の身（三井寺 光悦）
 子ゆへの闇にまよふ（世） 士故に迷ふ親心（響）
 子ユヘノ闇ニ迷フ（響）
 酒は百薬の長（大瓶狸々 大観） 同（餅酒一能）
 酒は百薬の長たり（響）
 定めなき世のならひ（善知鳥 光悦）
 三世の機縁（橋弁慶 大観） 同（世）
 鹿ををふ猟師は山を見ず（善知鳥 光悦） 同（世）同（響）
 しかをおふれうしは山をみす（毛）
 鹿ヲ追猟師ハ山ヲ見ズ（謔）
 師弟三世（雷電 大観）
 しなば一所（松虫 大観）
 慈悲は上より下り（藤栄 大観） 慈悲は上より降る（牛盗人

—三百—慈悲はかみよりくたる(毛)

慈悲は上から情は下から(譬)

⑤② 積善の餘慶(松虫 光悦) 同(金藤左衛門—三百)

積善家有餘慶(譬)

53 住めば宿(百万 大観) ちこくもすみか(毛)

すめばみやこ(世) 住ば都(譬) スメバ都(諺)

54 聖人に夢なし(清経 光悦) 同(毛)

55 梅檀は二葉より香ばし(蟬丸 大観) (撰取 大観) 同(譬)

せんだんは二ばよりかうばし(毛) 同(世)

梅檀ハ二葉ヨリ香シ(諺)

⑤⑥ 千里の行も一歩より起る(六浦 大観) 同(入間川—能) 同

(譬)

⑤⑦ 多勢に無勢(朝長 大観) 同(髭櫓—集)

多勢ニ無勢カナハヌ(諺)

58 千里を行も親心子をわすれぬ(隅田川 光悦)

59 塵積って山となる(高砂 大観) 同(譬)

塵積りて山と成る(毛) 塵積リテ山トナル(諺)

⑥⑩ 貞女両夫に見えず(錦戸 大観) 同(鈍太郎—三百) 同(毛)

同(世) 貞女両夫ニマミエズ(諺)

61 時人を待たぬ(朝長 大観) 時不待於人(譬)

時人ヲマタズ(諺)

62 富んでは驕りを知らざる(敦盛 大観) とみてはおこる(毛)

63 長居はおそれあり(盛久 光悦) ナカイハ畏レアリ(諺)

64 情は人のためならず(葵上 光悦) 同(世) 同(譬)

情ハ人ノ為ナラズ(諺)

65 人間万事塞翁が馬(綾鼓 大観) 同(世) 同(譬) 同(諺)

にんげんばんじさいをうがむま(毛)

66 鳩に三枝の礼をなし(笛之巻 大観)

鳩ニ三枝ノ礼アリ(譬) 鳩ニ三枝ノ礼アリ(諺)

⑥⑦ 仏法あれば世法あり(山姥 光悦) (車僧 大観) (舍利 大

観) 同(世) 同(譬)

68 煩惱あれば菩提あり(山姥 光悦) 煩惱即菩提(譬)

69 仏あれば衆生あり(山姥 光悦)

70 勝るをも羨まざれ劣るをも賤しむなれ(志賀 大観) 同(譬)

⑦① 身は一代名は末他(元服曾我 大観) 同(髭櫓—三百)

同(毛) 同(譬) 身ハ一代名ハ末代(諺)

⑦② 身を捨ててこそ名は久しけれ(藤 大観)

身を捨ててこそ浮ぶなれ(通門—能)

身をすてムこそうかふせもあれ(毛) 同(譬)

身ヲ捨てテコソウカム瀬モアレ(諺)

73 落花枝にかへらす破鏡二たひてらさず(八島 光悦)

74 良葉口に苦く忠言耳に逆ふ(楠露 大観) 同(譬)

らうやく口ににがし(毛) 良葉口ニ苦シ(諺)

『遊戲のことわざ』「たとえこと」とも言われる。謡曲中では教訓

のことわざに次いで多く五十句を教え、この二つで大半を占める。

物事を直接に表現するのでなく比喩でもって相手に伝えわからすた

めに用いている。「喩ふれば——」「——といへり」「——の如く」

ということばで引用している。

⑦③ あまの命を拾うた(夜討曾我 大観) 同(空腕—能) (名取川

—三百) 天の命拾ふた(譬)

76 石にも矢の立つ(放下僧 大観) —孝心の深い喩え

77 伊勢や日向の事(歌占 大観) 伊勢や日向の物語(譬)

- 78 一字千金(雷電 大観) — 師恩の喩え
一字千金(毛) 一字千金に易へがたし(世)
一字千金に当り一点他生を助く(譬) 一字千金(謬)
- 79 一期の浮沈(安宅 大観)
義経が疑われて怪しまれたときに一行の者が生死の別れる
危険な時のことばとして用いた。
- 80 一念無量の鬼(恋重荷 大観)
因果は車輪のめくるかごとく(鉄輪 光悦)
むんぐは車のわのことし(毛) 因果は輪る車の如し(譬)
- 82 うきふししげき川竹(班女 大観)(藤戸 大観)
優曇華の花(芭蕉 光悦)(現在七面 大観)同(譬)
- 83 「かくありがたき御法に逢ふ事盲亀の浮木優曇華の花
待ち得たる心地して」と用いられ待ちに待ったことの喩え。
優曇華(毛)
- 84 瓜を二つに割つたるやう(花月 大観)
うりをふたつにわりたることし(毛)
- 85 瓜二ツに割つたるやうな(譬) 瓜ヲ二ツニワツタヤウ(謬)
嬰兒の蟲を以って巨海を測り(木曾 大観) — とうていできぬ
喩え
- 86 鬼も神も納受する和歌の道(放生川 大観)
歌には鬼神も納受ある(花盗人 — 三百)
- 87 偕老同穴のかたらひ(楊貴妃 光悦)(籠太鼓 大観)
偕老同穴のかたらひも縁次第(世) 偕老同穴(譬)同(謬)
- 88 風は吹けども山は動ぜず(淡路 大観)同(世) — 天下泰平
肩を結んで裾に下げ 裾を結びて肩にかけ(百万 大観)
- 90 かみならぬ身を恨みかこち(富士太鼓 光悦)
- 91 九牛が一毛(唐船 光悦)同(毛)同(譬) 九牛カ一毛(謬)
昨日の花はけふのゆめ(葵上 光悦)
きのふはけふのむかし(毛)
- 92 昨日の淵は今日の瀬(飛鳥川 大観)
君はふね臣は水(養老 光悦)(国栖 大観)
- 94 狂人はしれは不狂人もはしるとかや(関寺小町 光悦)
同(毛)同(世) 狂人狂へば不狂人も狂ふ(譬)
- 95 狂人走レバ不狂人モ走ル(謬)
愚人夏のむしの火をけさんと飛入(経政 光悦)
愚人なつのむし(毛) 愚人夏のむし飛んで火に入る(世)
- 96 愚人夏ノ虫飛テ火ニ入(謬)
蜘蛛の家にあれたる駒はつなく(鉄輪 光悦)
- 97 蝸牛の角の争ひ(頼政 光悦)同(世) 蝸牛ノ角ノ争(謬)
勧学院の雀は蒙求をさへづる(頼政 光悦)同(毛)同(世)
- 99 同(譬) 勧学院ノ雀ハ蒙求ヲ嚙ル(謬)
外面は菩薩に似て内心は夜叉(現在七面 大観)
外面似菩薩内心如夜叉(譬)
- 100 故郷へは錦をきて帰る(実盛 光悦)
かへるにはにきしてゆく(毛) 古郷へは錦をきる(世)
- 101 故郷へは錦着て帰れ(譬) 故郷ニハ纏ヲキテカヘル(謬)
恋の重荷(恋重荷 大観)
- 102 水は水より出て水よりもさむく(檜垣 光悦) 同(毛)
子を思ふ闇の夜鶴(木賊 大観)
- 104 三界は水の上の泡(鐘遣 光悦)
鹿の角に蜂がさいた(車僧 大観)
- 105 しまのつのはちのさしたることし(毛)
- 106

しゝの角を蜂のさせる(世)

107 ししやうなき手柄(熊坂 大観) ししやうなきてがら(毛)

108 四鳥の別(隅田川 光悦) —親子の悲しい別れのたとえ

四鳥のわかれ(世)同(譬) 四鳥ノ別(謔)

109 日月上に明らかなれど雲霧を覆ふ(楠露 大観)

生死長夜(隅田川 光悦) (安毛 大観)

110 大悲の利剣(海士 光悦)

111 蟪蛄が斧(善界 光悦) (夜討曾我 大観)同(世)

112 蟪蛄が斧を取て龍車に向(毛)

113 蟪蛄が斧を以て隆車に向ふが如し(譬) 蟪蛄ガ斧(謔)

電光石火(柏崎 大観)

114 とふ鳥も地におち(咸陽宮 光悦) 飛鳥も落つる勢ひ(譬)

115 難波の蘆は伊勢の浜荻(蘆刈 大観) 同(能)

116 似合はぬ僧の腕立て(熊坂 大観) 同(世)

117 薄氷をふむ(立田 光悦) (天鼓 光悦) 同(毛)

118 羊の歩み 隙の駒(砧 大観) (百万 大観)

119 盲亀の浮木(実盛 光悦) (鶴 大観)

120 やけ野の雉子よるの鶴(唐船 光悦) 同(譬)

焼野ノ雉子夜ノ鶴(謔)

(121) 綸言出でかへらねば(蟬丸 大観) (小鍛治 大観) —帝の仰

綸言汗のごとく(三人夫一能)同(毛)同(世)

綸言は如し汗(譬)

122 籠鳥は雲をこひ 帰雁は友を忍ぶ(檜垣 光悦)

ろうてうくもをこふ(毛) 籠鳥の雲を乞ふ(譬)

籠鳥ノ雲ヲ恋(謔)

123 和光同塵結縁の始(蟻通 光悦) (加茂 光悦)

和光同塵(能)

124 猿猴が月にあひをなし(善界 光悦)同(毛)同(世)

猿猴が水の月を捕んとするが如し(能)

猿猴カ月ヲ捉(謔)

身に及ばぬ企ての喩へとして用いられる。

五、おわりに

以上、謡曲のことわざ百二十四例をあげたが、狂言のことわざと重複するのは二十五例である。それらのことわざは口調もよく、室町時代にはよく使われ、普遍的なものであったと考えてよいであろう。

紙数の関係上、ことわざに近い周辺のものとして、漢籍の故事や詩句、あるいは漢訳仏典からとられたものについて論を進めることができなかった。

狂言、室町時代物語集、謡曲と室町期のことわざについて考えてきたが、次の作業として、謡曲とつながりの深い古浄瑠璃のことわざを抜き出しているので別の機会に発表したいと思う。

(注1) 日本文学大辞典「ようきよく」の項、藤村作編新潮社

(注2) 解釈と鑑賞、第二六九号一ページ、安藤常次郎

(注3) 謡曲、狂言、花伝書(日本古典鑑賞講座) 三四ページ

(注4) 国語学辞典(東京堂)「ことわざ」の項

(石川県立松任農業高校教諭)